

# 石見の人麻呂

——『万葉集』卷二の中でどう読むか——

高松寿夫

まかりたる也。

『万葉集』卷第二「相聞」に掲載される、「柿本朝臣人麻呂從<sub>レ</sub>石見国別<sub>レ</sub>妻上来時歌」と題される作(2—1—31—1—39、以下「石見相聞歌」と呼ぶ)と、同卷「挽歌」に掲載される「柿本朝臣人麻呂在<sub>レ</sub>石見国臨<sub>レ</sub>死時自傷作歌」と題される作およびそれに付随する一連の歌群(2—1—33—1—37、以下「石見臨死歌群」と呼ぶ)は、人麻呂に関わって、いずれも石見国を舞台とする作品であるために、研究史上、相互を関わらせて考えることが試みられることがあった。

たとえば、賀茂真淵『万葉考』別記一「柿本朝臣人麻呂」には、次のような一節がある。

いと末に石見に任て、任の間に上れるは、朝集使・税帳使などにてかりに上りしもの也。此使には、もろもろの国の司一人づつ九十月に上りて、十一月一日の官会にあふ也。其上る時の歌にもみち葉をよめる是也、即石見へ帰りてかしこに身

晩年の石見国赴任を想定し、任期中に朝集使や税帳使(正税使)などとして、一時的上京を果たし、間もなく石見へ戻ったことを想定する。ここで想定される一時的上京にあたって、任地石見を一旦離れる際に詠んだのが、「石見相聞歌」なのである。そのような事情を想定するのは、「石見臨死歌群」の存在によって、人麻呂が「かしこにて身まかりたる」という「事実」があるからである。真淵の推定は、石見で妻と別れて上京したという「事実」と、石見で最期を迎えたという「事実」とを、両立させるべく配慮したものとしては、適切な判断といつてよい。近世はもとより、近代に入つてなお、斎藤茂吉(「柿本人麿」)、武田祐吉(『国文学研究 柿本人麻呂攷』)、澤瀉久孝(『万葉集注釈』)といった諸家が、基本的な方向性を支持するものもつともなことだといつてはできる。

一方で、真淵とは異なる人麻呂の生涯を想定する立場も存在した。真淵以前では、契沖(『万葉代匠記』)などは、「石見相聞歌」を、

人麻呂の作歌活動の中でも、とりわけ初期の作品と捉えているかのごとくである。これは、人麻呂石見本貫説に則る立場である。

石見に生まれ育った人麻呂が、若くして妻帯し、ほどなく上京出仕し、それから宮廷を中心とする華々しい作歌活動を見せる、という生涯を想定するもので、いふならば、「石見相聞歌」は、人麻呂の作歌活動の中でも、もともと初期に位置する作品で、「石見臨死歌群」は、晩年、本貫の石見に戻った人麻呂が、死に臨んだ際の歌群と考えるものようである。人麻呂石見本貫説は、契沖の師である下河辺長流（『六々歌人贊』）もすでに主張しており、荷田信名（『万葉集童叢抄』、鹿持雅澄『万葉集古義』）らが継承する。しかし、こんにちの理解よりすれば、人麻呂石見本貫説はまず成り立たないことは明らかといえようし、そもそも『万葉集』が、人麻呂をそのような素性の人物としては扱っていないと認めざるを得ない。早く山田孝雄（『万葉集講義』）が、「石見臨死歌群」二二の題詞について、「ここに、在石見国云々とかけるによりて、本来石見国の人にあらざることを言外にさとるをうべし」と指摘する。『万葉集』巻二に限定しても、草壁皇子の死に際してすでに宮廷を場に作歌活動を認める人麻呂が、石見出身とすれば、ここからの上京は、天武朝か持統朝の極初期でなければならぬが、「石見相聞歌」の配列位置は、年代順の配列を原則とする『万葉集』巻二において、持統・文武朝作品群のほぼ最末尾が選ばれている。

## 二

しかし、真淵のような捉え方でよいとしてしまうのは、作品の理解として問題がある。

真淵は、「石見相聞歌」が詠まれた「上京」を、朝集使などへの服務のためと考えたが、各国から京への往復にかかる日程については、『延喜式』主計式の行程日数がよく引き合いに出される。これは貢調使などに適用されるべきもので、下りより上りに日数が多くかかるのは、調物や庸物として政府に納入される多くの物量を運搬するため、朝集使など担当官の移動だけで済む他の出張の場合、主計式に規定された下りの日数が目安になるであろう。石見国の場合、十五日と規定されている。理論上、一ヶ月あれば、京を往復することができたわけである。もちろん、報告内容の査定期間などもあったはずで、思わぬ長期の京滞在を餘儀なくされる場合もあったであろうが、それでも数ヶ月で任国に帰還したはずである<sup>1</sup>。

しかし、「石見相聞歌」に展開される別れの嘆きは、朝集使などによって京へ出張する際の、どんなに長くとも数ヶ月後には再会できることを前提とした旅立ちの感慨として捉えるべき性格のものではなからう。もちろん、数ヶ月の旅への出立とはいえ、この時代の事情を考えれば、常にそれが永遠の別れにつながりかねない予感がはたらく時代であったとは言える。とはいえ、わずかな数ヶ月の、かつ帰還を前提とした旅に関わる抒情としては、どこかにそれをうかがわせる叙述があるものであろう。近年の「石見

相聞歌」をめぐる論稿においても、たとえば、平館英子「石見相聞歌―放り行く人・その心<sup>(2)</sup>」は、作品の、特に第一歌群のことはづかいの詳細な分析をとおして、「再会は期待されていない」別離を読み取る。同様な指摘を、いまそれぞれの論の詳細は省略して、指摘そのものだけをなおいくつか挙げてみるならば、次のような発言の数々が存在する。すなわち、伊藤博「釈注」は「もう二度と逢えないことを覚悟した男女の悲別」といい、渡辺護「石見相聞歌<sup>(3)</sup>」は、「作品はやはり、再会が期し難い永遠の別離をうたっているとしか思えない」といい、「石見相聞歌」を主たる対象とした論ではないが、村田右富実「天智天皇不予の時の歌二首<sup>(4)</sup>」は、「二度と逢えないことが前提となる「石見相聞歌」と述べる。現在の研究の趨勢として、「石見相聞歌」が、再び妹と会うこと、妹のもとに帰還することの見込みがない別離における抒情であることは、暗黙の了解になっていと言つてもいいのかもしれない。諸論稿で指摘された事柄とは別に、そう読むべきであると判断する、本稿なりの根拠も挙げておくことにする。

- A 幸<sup>三</sup>讚岐国安益郡<sup>二</sup>之時軍王見山作歌（1―15―6）  
 B 丹比真人笠麻呂<sup>下</sup>筑紫国時作歌并短歌（4―15〇九―5  
 一〇）  
 C 天平元年己巳冬十二月歌一首并短歌（9―1787―17  
 八九）  
 D 属<sup>レ</sup>物発<sup>レ</sup>思歌一首并短歌（15―13627―13629）  
 E 述<sup>三</sup>恋緒<sup>レ</sup>歌一首并短歌（17―13978―13982）  
 F 入<sup>レ</sup>京漸近悲情難<sup>レ</sup>撥述<sup>レ</sup>懷一首并一絶（17―14〇〇6―14〇〇

〇七）

- G 追<sup>三</sup>痛防人悲<sup>レ</sup>別之心<sup>二</sup>作歌一首并短歌（20―14321―143  
 333）

- H 為<sup>三</sup>防人情<sup>レ</sup>陳<sup>レ</sup>思作歌一首并短歌（20―14398―144〇〇）

- I 陳<sup>三</sup>防人悲<sup>レ</sup>別之情<sup>レ</sup>歌一首并短歌（20―144〇8―14412）

右に列挙したのは、妻をはじめとする家族と離れて旅にある感慨を扱った長歌作品である。Bの丹比笠麻呂歌では、反歌（五一〇）で「還り来む」、「往きて来ましを」といい、帰還への願望を述べる（反実仮想の「まし」は、帰還が不可能であるとするのではなく、いつと帰還の期日を特定することの困難を言ったものである）。Cは、左注に「笠朝臣金村之歌中出」とある作品であるが、二首目の反歌（一七八九）で、旅立ちに際して妻が結んでくれた下紐を、「直にあふまで」けつして解かないと誓う。それは旅に関わる一種の風俗を背景にもつが、妻のもとへの帰還を信じて疑わない心情が、離別の悲嘆と裏腹に存在していることをうかがわせる。Dは、遣新羅使歌群に収録されるが、「いへづとに いもにやらむ」（三六二七）という言い方に、端的に帰るべき家と、そこにいる妻の存在をうかがわせる。Eは、越中赴任中の大伴家持が、京に残してきた妻への恋慕を述べるが、長歌末尾に「吾をまつ」「妹」を「あひて早みむ」ことを述べており、帰還を強く願望する。Fは、家持が正税使として上京するに際して、文雅の交友を深めつつあった大伴池主とのしばしの別れを惜しんだ作である。国司としての任務に従事するための別れを扱う点で、『万葉考』などが捉える「石見相聞歌」と同じような状況下の別れを扱うのであるが、別れは、

あくまでも初夏の行楽にとつての絶好の時期（「あそぶさかり」四〇〇六）を、池主とともに過ごせまいという一点において嘆かれているに過ぎず、「石見相聞歌」との悲嘆の対照は激しい。相手が配偶者ではないこと、石見にくらべて越中は比較的京に近いという諸点を勘案しても、国司の任務への従事による一時的離別は、むしろ家持の詠んだようなものとして感受されたと考えるほうが、相応なのではなからうか。

巻二十から挙げた三作品（G―）は、いずれも大伴家持による防人関係歌である。題詞によれば、家持が防人に成り代つて詠んだ作で、いずれも家族との離別の悲しみを抒情の中心に据える。Gは、防人に対する同情的な思いを、あくまでも第三者の立場から叙述するので、旅行く者じしんの立場で述べる、ここに列挙した他の作品とはいささか趣が異なるが、他の二作品は、防人の立場そのものになって詠まれる。防人の無事の帰還を潔斎して待つ家人（G四三二一）、早く帰ってくるようにと云つて送る家人（H四三九八）、旅先から家人への言伝を託そうとする防人（一四四〇八）等々が、大きく取り上げられており、無事の帰還がいずれも大きな関心事となつている。朝集使などに比べて防人服務の方がよほど深刻な別れの事態と言え、それゆえにこそ、留守の家人の潔斎や無事帰還への願いがことさらに話題になるのだろう。

最初に挙げたAの軍王歌には、帰還への直接の言及はないが、しのひの対象である妻のことを「家なる妹」（五）と捉えるのは、やがて帰るべき家に妻が待つていることを前提にした言い方である。また、妻など家人との別離が直接読み込まれていないものの、

長歌において「石見相聞歌」第一長歌の表現を具体的に意識していることが認められる13―三三四〇―三三四一も、長歌・反歌ともども「幸く有らば　また反り見む」と、帰還への希望を述べている。

「石見相聞歌」には、みてきたような諸作品にうかがえるごとく、詠者の帰還願望や妻がそこで待つている、そしてやがてそこへと帰つてゆくべき家への言及が、皆無なのである。<sup>(5)</sup> どんなに長くとも数ヶ月の一時出張のために、妻と離れ離れになることが悲しいのであれば、なによりもまず、帰還の日のことを思うものである。「石見相聞歌」は、そのような事情とは明らかに異なる別れを果たしてきた末に詠まれているとみなければならぬ。つまり、石見国での役務の任期が切れ、京へと帰還するにあたって、石見でなじんだ地元の人々と別れてきた場面を想定すべきなのである。男は、これで帰京することにより、石見の妻とは永遠に別れることとなるのである。男に帰還のあては、ない。

### 三

「石見相聞歌」を、朝集使などの服務のために一時的上京をする折の作とする理解は、作品そのものの理解よりも、実人生としての可能性を優先させた理解と言わざるを得ない。そのことを、やや詳しくあげつらつてきたのであるが、そのような本稿の議論を、なぜそのようなことをいまさら、と感じる向きはあるかもしれない。近年では、人麻呂の作品を、あくまでも個々の創作として捉え、人麻呂個人の実人生と切り離して理解する傾向が一般的

となったこともあり、「石見相聞歌」と「石見臨死歌群」との整合性をどのように考えるかという事柄に、特段の注意を払うことじたいが希薄となった観がある。たしかに、個々の作品がどのような背景や構想のもとに創り出されたのかという観点は、作品論においては正しい態度と考える。一方で、『万葉集』巻二の相聞と挽歌に、相対応するように配置された人麻呂の両作品で、いずれも石見国が舞台として設定され、ともに男女間の情緒を主調としていることに照らせば、両作品に関わりを読ませようとする構想が働いていることも、否定できない。『万葉集』の題詞は、はっきりと両作を柿本人麻呂がそれぞれの私的狀況下において作ったといっているのであり、これを『万葉集』巻二というテキストにおいて読むとき、両作の題詞で述べられている状況が、ともに成り立つ場合は、やはり想定されなければならないのではないだろうか、というのが、本稿の問題意識である。

『万葉集』巻二は、巻一ともども、宮廷における和歌の歴史の叙述を試みていると考えられる。『万葉集』の編纂論は、改訂増補をめぐって諸説あり、簡単に総括できる性格のものではない。特に巻一卷二は、『万葉集』の中核的部分として、さまざまな論が繰り広げられている。しかし、今日の評価よりしても万葉前期を代表する有名歌が多く、またそれらが制作順に沿って、ほぼ整然と配列されている『万葉集』巻一卷二に、宮廷に起こった和歌の精華を、時間順に配列して行こうという大方針があることは、紛うかたがない。

「雑歌」「相聞」「挽歌」という部立についても、それは単に作

品の性質による分類を施したというだけでなく、相互に歴史化が図られている。この点に関しては、すでに旧稿で論じたことがあるが、そこでは、巻一卷二から読み取れる事柄を、和歌の歴史そのものとして実態的に捉えた——そうすることも、『万葉集』の作品を個別に論じて作品論が展開できるのと同様に、方法的態度としてあり得る、と考える——のであったが、本稿の関心にひきつけて、それを『万葉集』巻一卷二が描こうとしている歴史叙述として捉えてみるならば、次のようになる。『万葉集』においてすべての冒頭に位置づけられている「雑歌」は、実質的に舒明朝から始まる和歌の歴史全体をカヴァーするかたちで作品が収録されるが、「相聞」「挽歌」は、実質の始発を、「雑歌」にほぼ一世代遅れる天智朝に設定する。しかし、やがて「相聞」「挽歌」で表現されるべき主題は、巻一に所収された「雑歌」の中にすでに兆しを見せており、舒明朝宮廷の儀式・宴席において発生した和歌は、それぞれのあり様や場を得て、「相聞」「挽歌」へと自立して行つたという、「和歌の歴史」がそこには主張されているのだと思う。

そして、いずれのジャンルにおいても、柿本人麻呂という歌人は、大きな存在として位置づけられるべく、作品が収録されている。とはいっても、「相聞」に限っては、「石見相聞歌」一作品のみしか収録されないのは、「雑歌」「挽歌」に比すと、相対的に作歌活動の多様さを欠く印象がある。

そもそも人麻呂は、巻二の基準で言えば、「相聞」を詠むべき歌人ではなかったのだ、と言えるのだと思う。巻二は、「相聞」

というジャンルが自立して間もない時期の諸作品を収録したという体裁をとっているのだと思うが、作品を担っている歌人は、天皇やその子女たち、藤原鎌足、その他、高級貴族やその子弟との相手によるものにはほぼ限られる。中でやや異質な存在といえるのは、人麻呂を除くと、久米禪師・額田王・三方沙弥といったところかと思う。久米禪師や三方沙弥については、それに対する実態の和歌史の上での定位の試みをかつて論じたが、おそらく、この『万葉集』巻二以降に定着する（と位置づけられる）、藤原京や平城京といった都市に住む、広く一般の人びとの日常生活の中で交わされる相聞の流行・流布——『万葉集』としては、やがて巻四や、さらには巻十一・十二で大量に収録される相聞の数々にそれは示される——の元祖としての位置が与えられているのだと考える。もつとも、久米禪師が石川郎女と贈答する九六〇一〇〇の歌群は、作者の二人は伝記未詳とはいいながら、久米禪師、石川郎女という名乗りが、この周囲の作者群にひけをとらない尊貴性をうかがわせ、なおかつ石川郎女は、大津皇子や大伴家の貴公子たちと相聞でわたり合う存在として、『万葉集』巻二に頻出する存在としてあり、それほど違和感なく天智朝の相聞群に収まっている、とも言えるのだと思う。額田王は、彼女の活躍のピークであった天智朝には、もっぱら雑歌の提供者として記録されており、相聞は一切収録されない。それが、天武朝以降、「雑歌」にまったく姿を現さなくなり、持統朝にいたって過去を懐かしむ態の相聞をかかず（二——一——一三）のは、つまり、天智朝に華々しい活躍を展開した額田王が、天武朝に入ってその地位を失い、公

の場から退場し、持統朝まで生き長らえたものの、作歌は私的な場面での詠作に限定されたという、歌人の消息を、『万葉集』が語っているのだと思う。

そのような中で、人麻呂は、けっして宮廷の中核に位置するような地位ではなく、またそのような地位にあった相手と相聞を交わせる人物でもなかった。彼は、宮廷の諸行事で折々に相応しい作品を提供する専門的歌手といった役割が与えられており、その役割において、他に比類のないめざましい業績を残したことを、やはり『万葉集』巻一巻二は、宮廷の和歌の歴史として述べているのだと思う。

右のような、和歌をめぐる宮廷の歴史叙述の中にあつて、人麻呂をめぐる二つの石見を舞台とした作品群は、どのように捉えられるべきものとして、『万葉集』巻二は定位しているのか、という問題を考えていたのである。

#### 四

注釈書や論考において、『万葉集』巻二の人麻呂による唯一の相聞作品の舞台と、挽歌部に収められた人麻呂終焉歌の舞台が、ともに石見であることについて、もし言及することがあるとすれば、現在では、それは作品の成立時の構想や、人麻呂作品の享受史の事柄として扱われる。そのことは、作品個々の作品論の試みが有効であるのと同様に、意味のある営みだと考える。しかしそれとは別に、(もちろん人麻呂の美人生の再構成といった事柄とも別に)『万葉集』巻二が、テキストとして主張している顛末を検討した

い。「万葉集」を、単なる和歌史検討のための資料集——もちろん、そのような資料として扱える文献であることに間違いはない——としてではなく、ひとつの編纂されたテキストとして扱う場合、作品がどのような秩序の下に配列されているのか、その配列の下にどのようなコンテキストが、結果として成り立っているのか、は分析されねばならない事柄である。もちろん、これまでにもそのような関心のもとに、多くの分析が行われてきたのであるが、その一環に位置づけられるべく、石見を舞台とした人麻呂関係歌を理解するとすれば、どのような理解が適当なのであるのか、ということである。

そう考えてくるとき、太田豊明「臨死歌」<sup>(9)</sup>が示す理解が、注目されるように思われる。太田氏の提示する両作品間の経緯は、石見から妻と別れて旅に出た男がその道中で行路死人となった、というものである。太田氏の論は作品の当初の構想や、それがどのように「万葉集」で記録されるようなあり様を来たしたか、といった事柄を指摘することを目的としており、より具体的には、「石見相聞歌」で石見の妻と別れて旅してきた「われ」が、大和葛城山中まで戻ってきたところで行路死人となった、という展開を想定する。「石見臨死歌群」の題詞に反して「われ」の死の舞台をそのように考えるのは、これも当該の歌群を論ずるにあたってしばしば話題になるように、題詞で石見のこととされながら、作品に詠み込まれる地名「鴨山」「石川」が、大和・河内を喚起する地名であることによる。太田氏は、「石見相聞歌」と「石見臨死歌群」を、もともと作者人麻呂が一連の作品として構想し

たものと考ええる。(ただし「伊藤博の言うように、二二三五の歌群は、作者人麻呂によって「石見相聞歌」の一種の統篇として企図されていた<sup>(10)</sup>とも述べるので、「石見相聞歌」の先行を想定はしているらしい。)そして、それが後世の享受の中で、主人公「われ」が人麻呂じしんとされ、「石見相聞歌」にはその妻とされる依羅娘子の短歌が付されたことから、さらに「石見臨死歌群」の「妹」も依羅娘子だと付会されたという。しかし、依羅娘子という名は、これもよく指摘されるように、「鴨山」「石川」「丹比」という、「石見臨死歌群」の固有名詞とより深い関係にあるというべきで、享受史的な捉え方をするのであれば、むしろ、「石見臨死歌群」においてまず人麻呂の妻が依羅娘子とされたのを受けて、「石見相聞歌」の後に依羅娘子の一首が配列されたと考えるべきであるようだ。また、もともと石見からの帰途、大和葛城で行路死人となったのならば、そのとおり題詞に記されて問題はないはずなのに、あえて死の現場を石見とするのも不審で、さらに享受や伝来の経緯に複雑な事情を種々想定しなくてはならない事態に陥ってしまいそうだ。太田氏の示した理解は、むしろ、『万葉集』巻二に、石見を舞台とする人麻呂関連の相聞と挽歌が掲載されたレヴュエルでの捉え方として、有効なのではないだろうか。個々の作品の成り立ちはさておいて、『万葉集』巻二は、両作品の間に、そのような経緯を理解させようとしている、ということだと思うのである。

とはいえ、そう考えればすべて問題は解消というわけにはいかない。さきほど、「石見相聞歌」が石見への帰還、妹との再会を期していない別れを述べていると指摘したが、「石見臨死歌群」

の人麻呂は、死に臨んで「待ちつつ」ある「妹」を思う（二二三）。妻も人麻呂の帰りを「今日今日と」待ち続けていたとうたう（二二四）。うたわれている旅の事情が、あきらかに「石見相聞歌」と異なっているのである。この点に照らしても、「石見臨死歌群」が（あるいはその一部が）、「石見相聞歌」の続編として制作された、ということとは考え難いように思われる。少なくとも、作者人麻呂の認識として、そのような意図はあり得なかつたのではなからうか。「石見相聞歌」と「石見臨死歌群」との旅のあり様は、まったく異なつた設定の上に成り立っていると云わざるを得ない。しかしながら、それならば「石見臨死歌群」のごとき旅のあり様を前提に、「石見相聞歌」に立ち戻ってみることで、かえって『万葉集』以来の理解に回帰する可能性はないか、という懸念には及ばないものと思う。『万葉集』の構成として、まず「石見相聞歌」が配置されるのであり、「石見相聞歌」は、作品それじたいとして、ここで扱われる別れが、一時的なものではないことを強固に主張するからである。「石見臨死歌群」では、「石見相聞歌」のそうした前提が一旦さて置かれるのであるが、直前に配列される人麻呂の「石中死人歌」（二二〇）（二二二）で、行路死人を見た人麻呂が感じた「鬱悒しく 待ちか恋ふらむ 愛き妻らは」（二二〇）との感慨——それは行路死人歌一般の感慨でもあるのだが——どおりに、いまや行路死人となりつつある人麻呂じしんが感じ、依羅娘もふるまうことで、つまり、行路死人歌の定式におさまる（おさめる）ことによつて、当面の違和感は感ぜられずに理解できるようにはなつていたのであろう。

『万葉集』巻二は、「石見相聞歌」を詠んだ人麻呂を、その直後に生涯を終えたものとして捉えよう（捉えさせよう）としているということなのだろう。もちろん、諸論が想定するように、『万葉集』以前に、すでに人麻呂の石見での死が伝説化してあつたのだと思う。『万葉集』はそれを採用しているにすぎないのであるが、『万葉集』巻二（巻一を含めて考えてもよい）が、知られている人麻呂の作品をすべて網羅したわけではなかつたことは、巻三巻四にもなお人麻呂作歌が存在していることから、明らかである。「石見臨死歌群」が、『万葉集』巻二にふさわしくない内容と判断されたならば、それを収録しないという態度もあり得たはずなのである。

## 五

それでは、そのような『万葉集』巻二の配列への意識から、何を讀み取ればよいのだろうか。

端的に指摘するのであれば、「石見相聞歌」を、人麻呂の作歌當為のほとんど最終点に位置づけたかつた、ということになるのではないか。さきにも触れたように、巻二の相聞内の配列において、すでに持統朝末期ないしは文武朝ころの作品と推測される位置に据えられているといえるのであるが、人麻呂唯一の相聞作品ゆえに、彼の作歌活動の期間における時間的位置づけがかならずしも明確にはなされない位置に「石見相聞歌」は配列される。そもそも、年代順配列を原則とする巻二であるが、「相聞」については、各天皇代内においては、作者の身分によつて類聚されてい

るとの指摘があり、同一天皇代内の作品の配列は、制作年代順を反映していない可能性がある。そうだとすれば、「相聞」に一品しか掲載されない人麻呂については、一層、その作品が彼の作歌活動の中でいつごろの作品として位置づけられるのか、明確でないことになる。しかし、「石見相聞歌」詠作の直後の死が設定されることで、それが人麻呂の作歌活動の最末期の作であることが明確化することは間違いない。すでに確認した『万葉集』巻二の性格に照らせば、ことは、人麻呂の一品をどこに位置づけるかという関心にとどまらず、つまりは、『万葉集』巻二が、どのような和歌の史的展開を描こうとしているか、に関わる意識がそこには働いていると考えられる。

ここで、さきほどいささか話題にした、人麻呂は、巻二の基準で言えば、「相聞」を詠むべき歌人ではなかったのではないか、ということに立ち戻ってみたい。それにもかかわらず、『万葉集』巻二が「石見相聞歌」を掲載するのは、つまり、それまでの宮廷の和歌の歴史を記録する上で、どうにも切り捨てようがない、無視しようがない圧倒的な存在感を、人麻呂のこの作品が持っているからだ、ということなのではないか。『万葉集』巻四をみれば、『万葉集』巻二は、多くの人麻呂の相聞作品を無視していることがわかる。部分的にはいざ知らず、巻二編纂時点で、やがて巻四に収録される人麻呂作の相聞が、ことごとく知られていなかったなどということは、考えられない。巻四所収の人麻呂の相聞の多くは、巻二の基準に照らすと、入集に相応しくない作品だったから切り捨てられたのだろう。繰り返しになるが、そもそも、作者

が人麻呂である時点で、巻二の基準からは外れざるを得ないのである。『万葉集』巻二は、その編纂構想の基準によって作品を選出し、配列して行っているのであるが、「石見相聞歌」ばかりは、その基準を超えて、作品そのものが、その存在感によってしかるべき位置を要求し、あの位置に割り込んできているということだと思われる。しかしその作品は、人麻呂の多様な作歌活動の *One Day* としてあるのでなく、その生涯の最期の直前の絶唱としてあった、かのように巻二は配列している。いうなれば、基準を超越して『万葉集』巻二に割り込んでこようとする「石見相聞歌」の存在感と、宮廷における相聞の歴史叙述を志向する巻二の構想との、葛藤の所産が、「石見臨死歌群」を含めた、いまみるような配列となったということなのだろうと考える。

そもそも、「石見相聞歌」は、「相聞」なのだろうか。『万葉集』巻二のいう「相聞」は、作品の主題による分類ではなく、あくまでも機能面に即した範疇である。それは、巻一の「雑歌」も同様で、「挽歌」も基本的にそう捉えてよい。「相聞」が「雑歌」と区別されるもつとも大きな点は、それらが私的な関係や場面で機能したことに求められる。そして、「相聞」の漢語としての語義によれば、贈答されたうたであることを基本とするが、「石見相聞歌」は、その点でも「相聞」ではない。(依羅娘子の一首が、とってつけたように配列されるが、形式的にも内容的にも、本来あったものではないものがとりあわされている、というのは、多くの先行論が認めるところである。それもまた巻二のテキストとして「ある」ことなのだが、この点については、増補論を援用して当面の問題とはそぐわないものとして脇

と言える。

に置くより仕方がない、というよりはかかない。) だいたい、旅にあって、配偶者とともにいない悲しさを独詠的に述べるのは、後世の範疇でいえば羈旅歌に属するのではないか。前々節のAに挙げた軍王のうたは、雑歌として巻一に掲載されている。軍王のうたが巻一の雑歌に掲載されるのは、それが行幸に従駕した際の作だからである。そして、同じ巻一の、文武朝の行幸従駕時の短歌群には、独り寝のわびしさや望郷の念を詠む作が多いのも、周知の事柄である。「石見相聞歌」は行幸時の作ではないので、もちろん巻一の基準に即せば、雑歌ではない。そして、内容的にも、行幸をはじめとする羈旅において詠作される、望郷の作品とは一線を画する激情性が込められている。やはり、『万葉集』巻一卷二に掲載するとすれば、相聞に収めざるを得ない作品とはなるだろう。「石見相聞歌」は、『万葉集』巻二の中で読むとき、あらゆる点で《異様な》作品なのだ、と言える。

先ほど、「石見相聞歌」の入集にあたって、「葛藤」ということばを用いたが、もちろん、その葛藤が、『万葉集』の新たな構想を展開させる力となることはあり得る。「石見相聞歌」の入集によって、本来、機能面を重視した『万葉集』巻一卷二の部立が、作品の主題・内容による分類を餘儀なくされ、部立の概念が、より主題本意にシフトして行く結果を招いた部分はあるように思う。そのことが、『万葉集』に巻三、巻四の増補へと道を切り開いている要素はある。『万葉集』を巻四あたりまで見渡してその構成なり構想をみるとときには、「石見相聞歌」の配列には葛藤をみるよりも、以降の巻々への橋渡しのな性格をみることも可能だ

注(1) 『万葉集』巻十八によれば、天平二十年の政務報告のために朝集

使として出張した、越中国掾の久米広繩は、翌年の五月二十七日になつてようやく帰還して中国。これをみると、朝集使としての出張が、半年以上の長期に渡ったかのごとくであるが、これは任務上止むを得ずそうなたというよりは、故郷である京に出張の機会を得た広繩が、みずからの意思で、あえて長期滞在に及んだものと思われる。実際、朝集使などが、役目を理由に上京し、任務終了後も任国になかなか戻ろうとしない事態はしばしば生じたようで、やがて平安時代に四度使そのものが実態をなくして行く遠因にもなっているようである。

(2) 平館英子「石見相聞歌―放り行く人・その心」(『万葉集研究』三一、塙書房、二〇一〇)。

(3) 渡辺護「石見相聞歌二首I」(一九九一初出、『万葉集の題材と表現』大学教育出版、二〇〇五)。

(4) 村田右富実「天智天皇不子の時の歌二首」(二〇〇一初出、『柿本人麻呂と和歌史』和泉書院、二〇〇四)。

(5) 渡辺護「石見相聞歌二首II」(一九九三初出、注(3)前掲書)も、「石見相聞歌」について、「家」の語が具体的に登場しないことに注目する。

(6) 拙論(雑歌)から(相聞)へ(一九九八初出、『上代和歌史の研究』新典社、二〇〇七)。

(7) 拙論(「相聞」の流布と媒体―久米禪師・石川郎女の相聞を中心に―)(一九九八初出、注(6)前掲書)。

(8) 『万葉集』に登場する石川郎女と呼ばれる人物には、いったい何人の同名異人が存在したかについてはしばしば話題になるが、実際は別として、少なくとも同じ巻二に、特段の区別なく(郎女)と「女郎」の違いがあるといえはあるが、それを別人物の書き分けと理解

すると、互いに関連しあうと考えざるを得ない一連の歌群Ⅱ一〇七  
Ⅰ一〇にそれが存在することの説明がかえってできない) 掲載さ  
れる石川郎女は、すべて同一人物として理解されるべく記載されて  
いる、と考えることに、テキスト内の不都合や矛盾は生じないと思  
われる。

- (9) 太田豊明「臨死歌」(『柿本人麻呂(全)』笠間書院、二〇〇〇)。
- (10) 引用中に言及される伊藤博の論は、伊藤博「人麻呂終焉歌」(『万葉集の歌人と作品 上』塙書房、一九七五)を指す。
- (11) 小川靖彦「始原としての天智朝—『万葉集』卷二の成立と編集(そ  
の二)〈書物としての『万葉集』—」(『青山語文』三四、二〇〇四)。

## 新刊紹介

久喜の会編

### 『古今和歌集』卷二十一―注釈と

論考―(新典社注釈叢書18)

第一勅撰集である『古今和歌集』卷一から卷二十の中で「他の巻とは明らかに異質である卷二十の存在」(本書十五頁)にのみ注目したのが本書である。その異質性とは収録された歌が歌謡の性質を持つことによるが、加えて卷二十の歌数の少なさからもこれまで論じられる機会は多くなく、そこに一石を投じたのが「久喜の会」である。「久喜の会」は、あとがきに紹介されるように上野理先生門下の研究者たちで構成されるが、専門は上代・中古の韻文・散文と幅広く、『古今和歌集』卷二十をそれぞれ

れの視点で論じた「論文編」は、共通の題材でありながら多方面から論じられ、非常に興味深い。膨大な研究史を踏まえた上に

丁寧が付された「注釈編」とともに、卷二十を新たに見つめ直す一書である。

(二〇一一年四月 新典社 A5判 四三六頁 税込一三六五〇円) (田原加奈子)

久保木寿子著

### 『(新注和歌文学叢書9)

#### 四条宮主殿集新注』

今まで、主殿集があまり研究されていないため、最初の注釈書である本書の意義は大きい。

本書は注釈と解説の二部からなる。注釈には校異、整理本文、現代語訳、語釈、補説が付されている。特に、補説は歌の表現、

背景などに関する考察、評価をきわめて丁寧に読み解いていく。

解説は主殿、主殿集の構成、表現、位置について論述する。主殿集の構成は特異なものがあり、表現は寂然・俊頼の釈教歌に先立つ果敢な表現の試みとして、当代女性の精神性と人生の有様を色濃く映し出した日記文学的歌集として扱うべきだと指摘されている。

主殿集の主題が持つ注目すべき点や、跋文の特異性から見ると、より積極的に定位する必要があると提案される。主殿集を研究する方はもちろん、後拾遺集あたりの和歌や日記文学を研究する方も必読の一冊である。

(二〇一一年五月 青簡舎 A5判 二七二頁 税込八四〇〇円) (杜 旖旎)